

インターポート

兵庫教育文化研究所だより

No.206

2019年10月21日

発行所 兵庫教育文化研究所
〒650-0004

神戸市中央区中山手通 4-10-8

人権差別について正しく学ぶ 人権教育部会

人権教育部会が洲本市で6年生の授業研究会をおこないました。「エイズと闘った少年の記録」(ポプラ社)の資料を使い、「身近な生活の中には、様々な「ちがい」から差別や偏見が生まれていることを理解し、「ちがい」を認め、ともに生きる社会をどのようにつくっていかうとする」というねらいで、授業がすすめられました。単元構想としては6時間扱いとし、これまでに、「ちがいのちがい」「男女共同参画を考えよう」「てるちゃんのかお」を用いて「あってもいいちがい」「あってはいけないちがい」等について考えてきました。



授業はまず、エイズについての正しい知識をおさえることから始まりしました。そして、授業者が物語のキーワードを示しながら、子どもたちに読み聞かせをおこないました。その後、「ココモ」と「シゼロ」の町で主人公に対する対応がちがったことについて、ホワイトボードを使いながらグループで事実を確認し整理していきました。

そして、「どうしてこんなちがいが出てきたのか」を個人で考えた後、班で意見を交流しました。子どもたちはこれまでの学習に立ち返って考え、「ココモでは正しい知識がないままに、怖い病気だと決めつけてしまっていたこと」「シゼロでは事前に病気について調べ理解した上で、周りの人々が関わりを深めていったこと」、病気による差別は「あってはいけないちがい」であること等の意見を出しあいました。最後に、主人公の言葉から今後の自分の生き方を考えました。相手を正しく理解しようとするのが差別を解消する手がかりになること、「ちがい」をゆたかなものに変えるための考え方や行動について全体で意見交流をおこないました。子どもたちが教室を自由に移動しながら考えを交流したり、班で考えをまとめたりと日常的な教育実践の積み重ねが感じられる授業でした。

研究協議では、授業者から、「日常の出来事から子どもたちにとって必要な学習であると感じ単元を設定したこと」「授業にとりくんだことで、男らしく・女らしくといわれていることが実はおかしいと気づくことができた」などの話がありました。参加者からは、「授業のテンポがよく、子どもたちが資料の要旨をしっかりとおさえて考えることができていた」「他の人の意見を大事にしていて、多様な意見が出せる学級集団づくりができていた」という意見が出ました。さらに、教科化された道徳の授業について、中学校では教科書の資料が長いものが多く、内容を理解するだけでも時間を要することや、価値の押しつけにならないよう子どもたちの本音を引き出せる授業の工夫をおこなっているなど「人権の視点を大切にされた道徳」についての交流がありました。

人権教育部会では引き続き「人権の視点を大切にされた道徳」の実践にむけて、研究をすすめていきます。
(本授業の指導案は「組合員専用ページ」に掲載しています。ID、パスワードは各地域組合へお問い合わせください。)